

2024年6月24日

カザフスタンのミドルパワー宣言 ——大国追従でも「グローバルサウス」でもない第三の道—— (ロシア研究会コメンタリーNo. 4)

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
宇山 智彦

カザフスタンは旧ソ連地域でロシアに次ぐ第2の経済大国で、中央アジアの地域大国であると同時に、独自の外交イニシアティブを発揮する姿勢でも知られてきた。1992年にアジア相互協力信頼醸成措置会議（CICA）の設立を提案して現在に至るまで事務局を務めているほか、反核外交、国際連合や欧州安全保障協力機構（OSCE）など国際機関の活動のサポートや、紛争解決の仲介に取り組み、2017年からは「アスタナ・プロセス」と呼ばれるシリア和平交渉をホストしてきた。2つの巨大な隣国であるロシア・中国との関係を重視しつつも全方位的な外交を行い、ウクライナ侵略戦争についてはロシアを正面から非難しないものの支持しない態度を明確にしている。2024年6月にスイスでロシアを招かずに開かれたウクライナ平和サミットには、カザフスタンは最終的には日程上の都合を理由に参加しなかったものの、直前まで参加の可能性を留保していた。

そのカザフスタンが最近、世界秩序における多国間主義の重要性と、その中で自国がミドルパワーとして果たすべき役割を強調している。カスムジョマルト・トカエフ大統領は2023年6月のアスタナ国際フォーラムで既に、世界秩序の基盤が破壊されつつあることと、過去半世紀で初めて核兵器使用の可能性が現れたことを憂える演説を行い、国連安全保障理事会の全面的改革を求める文脈で、「安保理でミドルパワーの声が強められ、明確に聞き取られる必要がある」と述べていた¹。そして2024年5月28日には、ヨーロッパの国際放送局「ユーロニュース」のウェブサイトにも、「ミドルパワーには多国間主義を救う力がある」と題する論説を発表し、ミドルパワー論を本格的に展開した²。

この論説でトカエフは、地政学的な激動と紛争が続く今日の世界で、多国間の解決の必要性が高まっているにもかかわらず、ウクライナやガザ、インド太平洋の状況が示すように、大国間の協力はますます困難になり、国連などの組織も麻痺し行き詰まっていると指摘する。そのような中で、ある程度の経済力・軍事力を備え、さまざまな問題に取り組む政治的意志と外交的洞察力を持つカザフスタンのようなミドルパワーが、自分たちの地域の内外で安定、平和、発展を保障し、妥協と和解への道を切り開くことのできる枢軸的なプレーヤーとして浮上していると述べる。グローバルな多国間システムを制約と感じがちな超大国と異なり、ミドルパワーはこのシステムに深くコミットしているというのである。

そしてトカエフは、多国間外交・対話にかかわるカザフスタンの実績や提案を列挙したうえで、「大国が多国間プロセスをますます信頼したがらず、小国が必要な影響力を欠く中、ミドルパワー

¹ “President Kassym-Jomart Tokayev’s speech at the Plenary Session of Astana International Forum,” Official website of the President of the Republic of Kazakhstan, June 8, 2023 <https://www.akorda.kz/en/president-kassym-jomart-tokayevs-speech-at-the-plenary-session-of-astana-international-forum-853210>

² Kassym-Jomart Tokayev, “Middle powers have the power to save multilateralism,” *Euroviews*, May 28, 2024. <https://www.euronews.com/2024/05/28/middle-powers-have-the-power-to-save-multilateralism>

には先頭に立つ義務がある。カザフスタンのような国々は、新たな活力をもって共に前進し、グローバルな舞台の単なる参加者ではなく、責任ある管理者としての役割を主張しなければならない。この重要な局面において、私たちはすべての国際パートナーに対し、共に多国間主義を強化し、私たちをここまで導いてきた国際システムを再活性化し再投資することを呼びかける」と述べた。

この論説に先立つ5月24日には、トカエフは訪問先のシンガポールで、「カザフスタンとミドルパワーの役割：安全・安定と持続的発展の推進」と題する講演をしている³。シンガポールは小国と言われるが、経済力や軍事力から見ればミドルパワーだと彼は述べ、「戦略的思考と効果的な外交により、シンガポールは東洋と西洋の架け橋となった」と賞賛した。そして、「発展しつつあるミドルパワーであるアスタナとシンガポールは、[世界の]分極化と分裂を単純に受け入れることはできない。あまりにも多くの懸念事項がある。対策を取らなければ、新たな冷戦に突入することになるだろう」と危機感をあらわにした。カザフスタンの立場については、「時に私たちの立場は懐疑的に扱われ、中立性を批判される。しかし、中立を信念の欠如と誤解すべきではない。逆にそれは、紛争や強制ではなく外交と対話を支持する、意識的な選択である」と述べた。

カザフスタンはロシアが主導する集団安全保障条約機構(CSTO)やユーラシア経済同盟(EAEU)のメンバーで、中国・ロシアを含む上海条約機構(SCO)にも加盟しており、常識的に考えれば中立国ではない。しかし実質的には多くの点で独自の立場を取り、特にロシアが引き起こす紛争については中立を維持してきたのも確かである。ロシアとあらゆる面で関係が深いうえ、7000キロメートル以上の国境を接し、ロシアからの潜在的な領土要求を含む脅威を抱えるカザフスタンは、中立性とミドルパワーとしての自立性を強調するのは、勇気を必要とする行為だということを理解する必要があるだろう。他の中央アジア・コーカサス諸国の多くは、ロシアのウクライナ侵略を支持しないながらも様子見の姿勢であり、ウズベキスタン、クルグズスタン(キルギス)、ジョージア、アゼルバイジャンのようにロシアとの関係を部分的に強化ないし改善している国もある。唯一アルメニアが、CSTOでの活動を停止し脱退の可能性を示唆するなど、やや性急とも言えるロシア離れを進めているのに対し、カザフスタンは極めて慎重に自立性の強化に取り組んでいるが、それでもロシアの圧力を受ける危険はある。カザフスタンやアルメニアがロシアの攻撃対象にならずに自立性を高められるよう、日本を含む域外国が支援することは、ユーラシア国際秩序の安定のためにも重要である。

カザフスタンの立場は、先進国(「グローバルノース」との違いを強調しながら利益を得ようとする、いわゆる「グローバルサウス」とも異なる。トカエフは2023年1月にインドが開いた「グローバルサウスの声」サミットに参加した際、持続的成長、気候変動とそれに伴う水不足・干ばつ、運輸ルートの多様化、パンデミックなどグローバルな課題を列挙し、それらに対処するには包摂的な多国間協力が必要だとして、カザフスタンに中央アジアとアフガニスタンの持続的成長目標のための国連センターを作るという、前年来の提案を繰り返した⁴。グローバルサウスという言葉を使いながらも「サウス」より「グローバル」を強調し、実質的には国連を中心とし先進国も含む国際協力を重視する姿勢を示したのである。

このような姿勢は、先進国に対する「グローバルサウス」の反感を利用しようとするロシアの方針に追随しないことともリンクしている。2023年5月にクレムリンで開かれた、EAEUの最高機関である最高ユーラシア経済評議会の会議でトカエフは、「われわれの経済同盟が最終的にはヨーロッパとアジア、グローバルサウスとノースの間の連結環となることを確信している」と述べた⁵。単に東西南北ではなく「ヨーロッパ」や「グローバルノース」という言葉を入れたのは、中央アジア

³ Глава государства выступил с лекцией «Казахстан и роль средних держав: продвигая безопасность, стабильность и устойчивое развитие» // Официальный сайт Президента Республики Казахстан. 24.05.2024. <https://www.akorda.kz/ru/glava-gosudarstva-vystupil-s-lekciej-kazahstan-i-rol-srednih-derzhav-prodvigaya-bezopasnost-stabilnost-i-ustoychivoe-razvitie-244173>

⁴ Президент Казахстана принял участие в виртуальном саммите «Голос глобального Юга» // Официальный сайт Президента Республики Казахстан. 13.01.2023. <https://www.akorda.kz/ru/prezident-kazahstana-prinyal-uchastie-v-virtualnom-sammite-golos-globalnogo-yuga-1303159>

⁵ Заседание Высшего Евразийского экономического совета // Президент России. 25.05.2023. <http://kremlin.ru/catalog/persons/593/events/71204>

諸国に欧米諸国との関係強化の害を説いて、EAEUを西側経済制裁に対抗する経済圏にしようとするロシア指導部の思惑に同意していないことを、暗に述べるためだったと解釈できる。

カザフスタンのミドルパワー路線は、日本にどのような示唆を与えるだろうか。日本は先進国の一員ではあるが、軍事面での制約に加え経済大国としての地位も相対的に低下する中、むしろミドルパワーとしての役割を追求することで独自性を発揮できる立場であると言えよう。日本にとって米欧との協力が重要であることは言うまでもないが、世界の主要な脅威であるロシア、中国などの大国主義を米欧が押さえ込もうとすることが、西洋中心主義や植民地主義を連想させて非欧米諸国の支持をなかなか得られない中で、日本が中小国の利益の擁護者として外交を展開することには大きな意義がある。そのためには、日米同盟を言い訳にして外交の選択肢を狭めがちな発想の転換を図る必要があり、その際、ロシアとの関係を壊さずにミドルパワーとしての独自性を追求するカザフスタンのやり方は参考になるだろう。また、多国間主義によって国際秩序を回復するためのミドルパワー外交のパートナーとして、日本とカザフスタンが協力できる可能性もあるはずである。

もちろんカザフスタンの立場や国益は少なからぬ問題について日本と異なっており、たとえば中国「封じ込め」に引き込もうとするような短絡的な行動をしても成功は見込めないことは言うまでもない。また、軍事力を含む外交上のリソースが大国より弱いミドルパワーの外交は容易ではなく、CICAを含むカザフスタンのこれまでの取り組みも必ずしも実効性が高いとは言えない。それでも、大国間対立による分断と、「グローバルノース」と「グローバルサウス」の分断の両方を乗り越えるために、ミドルパワーが幅広い協力関係のもとで力を尽くすべきだというカザフスタンの提案は、真剣に受け止める価値があるだろう。